人権啓発ネットワーク大東機関誌

ぬくもり

第27号　２０２３年６月

編集と発行　人権啓発ネットワーク大東
〒574-8555　大阪府大東市谷川１丁目１番１号
電話 072-870-0441　FAX072-872-2268

2023 ヒューマンコンサート

ゆらめく影絵と きらめきのガムラン

～異国の音色を楽しみに来ませんか～

ガムラン［gamelan］

インドネシアの民族音楽。バリ島やジャワ島のものが有名。打楽器が主体となっている。儀式や祝祭に欠かせない音楽で、舞踊とセットで演奏されることが多い。（ヤマハミュージックメディア・音楽用語辞典より）

延期が続き、３年ぶりで、新型コロナウイルス感染症拡大予防対策のため観客も７０名と制限のある中での開催となりましたが、小学生からご年配の方まで幅広い人たちと、様々なインドネシア芸能を楽しませていただきました。

まず、舞台がキラキラ輝き、民族楽器の柔らかくやさしい音色に釘付けになり、演奏者の佐々木宏美さんやローヒィット・イブラヒム（愛称ローヒィ）さんのトークで、インドネシア民俗音楽の世界に浸っていきました。

インドネシア共和国は、１３，０００以上の大小の島々と、世界第４位の人口で３００の民族から成り立っており、民族それぞれの習慣・風習・宗教観・考え方がある中、それぞれを認め合い尊重しながら、インドネシアという国を作り発展させてきているという事に感銘を受けました。世界では民族間紛争が頻繁に起こっているなかなので、特に心に残りました。インドネシアでは、「ゆっくりと無理はしない。」という概念が生活全般にあるようでした。圧巻だったのは、影絵です。ローヒィさん一人で何人もの登場人物をクルクル回りながら操り、セリフを言い、戦いのシーンは激しく、目が離せませんでした。

場内換気の休憩後は、インドネシアの竹楽器を使い、観客全員で演奏しました。みなさん竹楽器に初めて触れたのに「ジュピター」を演奏できたのにはびっくりでした。会場全体が満面の笑みで大感激でした。

１時間４０分ほどのコンサートがとても短く感じられ、インドネシアについて少しだけでも知ることができた時間であったと思いました。ローヒィさんから「皆さんインドネシアをぜひ知りに来てください。」と投げられた言葉に、「ちょっと行ってみようかな。」と気持ちをゆらしながら帰途につきました。

（レポーター：フジもん）

５月１日（日）～４日（木・祝）　第４０回人権パネル展

「暗やみに光を灯した人」　杉原千畝展

毎年、差別と人権をテーマに大東市・人権啓発ネットワーク大東主催で行われているパネル展で、野崎観音慈眼寺内の野崎観音会館で開催されました。のべ 2,289 名が来場されました。

第二次世界大戦中、日本領事館領事代理としてリトアニアのカウナスに赴任していた杉原千畝氏が、ナチス・ドイツに迫害された多くのユダヤ人にビザを発給し、約６,０００人のユダヤ難民を救いました。この「命のビザ」で救われた人たちはその子孫も含め２５万人以上に及ぶといわれています。会場では、命を救われた証言ＤＶＤの上映会も行われました。人の命の大切さ、平和の尊さを深く考える内容でした。

（レポーター：ねこたん）

©全国水平社創立１００周年記念映画製作委員会

映画『破戒』の上映と前田和男監督の講演会

～大東市憲法週間記念のつどい～

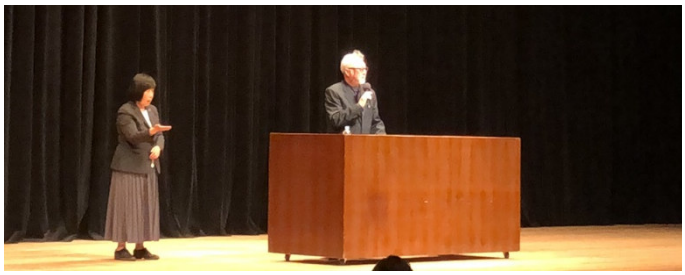
５月 12 日（金）午後6時30分～ サーティホール

映画「破戒」を知っていますか？

昨年、島崎藤村の小説『破戒』が 60 年ぶりに映画化されました。「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という宣言で知られる 1922 年の全国水平社創立から 100 年を記念して制作されたものです。今年の大東市の「憲法週間記念のつどい」では、この映画の監督の前田和男さんによる講演とそれに続く映画の上映が行われ、約 400 人もの人々が参加しました。

映画に込められた監督や俳優たちの思い

原作となる 1905 年発表の小説『破戒』は、小学校教員・瀬川丑松が被差別部落出身であることを絶対に隠し通せという父親からの「戒めを破る」までの心の葛藤を描いています。部落差別がはばむ人間の自由と平等、恋愛や友情について問いかけます。



60 年ぶり３回目となる今回の小説『破戒』の映画化では何をどのように描こうとしたのか。前田監督の講演では、映画の背景にあった監督や俳優たちの表現者としての思いなど、貴重なお話を聞くことができました。

主人公・丑松の人物像

前田監督がまず語ったのは、水平社創立や小説『破戒』の発表から 100 年以上もの月日が経った現在でもなお、部落差別はなくなっていないという事実であり、丑松を演じた主演の間宮祥太朗さんがこの映画出演のオファーを引き受けた大きな理由もそこにあったそうです。いわば 100 年前の人々や島崎藤村に対して、部落差別の実態を決して風化させないことを約束するような思いであったといいます。間宮さんと前田監督との間で瀬川丑松の人物像をどうすり合わせていったのかも語られました。出自を絶対に他人に知らせるなという父の戒めから、「心の底から笑ったことのない人生」だったのではないか。それでも心の内に秘めた人間としての熱をもった「静かな笑顔」。それは教師として

子どもに接するときだけは本物の笑顔になる。子どもは丑松にとって希望であり救いであった。だから丑松は子どもを対等な立場で敬愛の念をもって接する。そんな人物像にしようと。

撮影がはじまると、間宮さんは見事な演技を見せ、監督はその表情が「美しい」と感じ、周りのスタッフも感動していたことから、この映画の成功を確信したといいます。

恋愛、友情においても苦しむ

丑松の心は下宿先の女性・志保（石井杏奈さんが演じる）との恋愛においても揺らぎます。本来、恋は心躍るものであるはずなのに、つらい負の感情がうずまく。その表情の変化を「破戒」への助走として描こう。また、差別意識はもちつつも、出自を打ち明けた丑松を支える立場となった同僚教員でもある親友・銀之助（矢本悠馬さんが演じる）と丑松との息の合った演技に監督は「何度も泣かされた」といいます。他にも映画の中の登場人物をどう描こうとしたのか、それぞれの人物を演じた俳優たちのエピソードも語られ、映画に込められた思いが伝わってくるようでした。

希望と約束の映画

100 年以上も前に書かれた小説『破戒』は、被差別部落出身の人々を含めて、当時の社会に生きた人々に大きな問いを投げかけたことでしょう。今でいう人権啓発ともいえます。

100 年後の今日もなお、残念なことに部落差別は根強く残ってしまっていて、インターネットやSNSなどの情報環境の変化にともない、一層深刻な状況ともいえます。

「今回の映画『破戒』は、100 年後に向けての希望の糧となるように、先人からのバトンを未来に託していく。そんな思いでつくった希望と約束の映画です。」前田監督は最後にそう語って講演を結び、参加者を映画にいざなってくれました。

そのあとの映画の鑑賞を終えて、多くの参加者がそのメッセージを感じ取ったのではと思います。映画『破戒』はＤＶＤにもなっていますので、ご覧になっていない方はぜひ一度鑑賞してみてください。

（レポーター：かわかず）

★ **会員募集**
人権意識を高めるための研修会などへの参加・参画。
人権尊重の理念を広く市民に広げるための啓発・広報活動など。会費等はありません。

★ **ヒューマンライター募集**
大東市で人権推進につながる取り組みを行っている方々への取材をしていただける方（ヒューマンライター）を募集します。

★ **Facebook（フェイスブック）**
フォローお願いします！

【応募方法】様式は問いません。
ご住所　お名前　電話番号を記載の上　郵送、FAX でお願いします。
〒574-8555　大東市谷川１－１－１
大東市役所　（市民生活部　人権室内）　TEL：０７２－８７０－０４４１
人権啓発ネットワーク大東事務局　FAX：０７２－８７２－２２６８